

英語史からみる文型の変化～英語はなぜSVOなのか～

英語班:津嶋 勇樹、加納 三奈

要約

本研究の目的は、英語がなぜ基本語順にSVO文型をとるのかを明らかにすることである。調査によって、英語では会話の際、SVO文型は他の文型よりも解釈に誤解が生まれにくいということがわかった。従って本研究では、SVO文型へ固定された理由のひとつとしてSVO文型は他の文型よりも解釈上有利であるということが挙げられると結論付けられた。

1. はじめに

私たちが普段学習している英語はSVO文型をとるが、そもそもなぜ英語はSVO文型をとるのか疑問を抱き、研究を始めた。この理由を明らかにすることで日本人英語学習者が英語についてさらに深く知り、英語学習への心理的ハードルを下げて日本人の英語教育へ貢献できるのではないかと考えた。先行研究より、英語がSVO文型に固定化されていく過程で格変化が重要な役割を果たしていることがわかった。格変化とは、単語が主語や目的語といった文内での働きの違いに基づいて、その形を変化させることである。これによって昔の英語では現在のように語順の固定がなされておらず、比較的語順の自由が許されていた。また、英語の格変化は12世紀から15世紀にかけて消失し、それにより名詞の文の成分において解釈に齟齬が生まれる可能性が生まれ、それを防ぐために新たに語順の固定化が起こったこともわかった。また、同じように先行研究から、これまでの動詞を文頭に移動することにより得られる疑問文の中から今日のようなdoを伴う疑問文が13世紀に出現し、13世紀から17世紀にかけて増加したことがわかった。下にそれまでの単純系の疑問文とdoを伴った疑問文の例を記す。(a)は単純系の疑問文、(b)はdoを伴った疑問文である。

(a) Read you the book?

(b) Do you read the book?

疑問文のdoの役目は疑問文の語順をSVOに固定化することである。疑問文が固定化される必要があったことは英語の語順がSVOに固定化されつつあったことを表しているといえる。したがってこのことから語順がSVOに固定化されたことがわかる。また、その期間は疑問文のdoが出現しだした13世紀の少し前から始まったと考えられ、その期間は格変化の失われた時期と同時期であると考えられる。

先行研究から英語の語順が固定化された理由を知る事は出来たが、語順がSVOのみに固定化された理由は知る事が出来なかった。当初の頃、かつての英語では語順は自由であったが基本文型として用いられる語順はSVOが圧倒的に多数であったため、語順の固定化も多数であったSVOへと固定化されたという仮説を立てた。しかし、唐沢一友氏の先行研究から古英語期から中英語期ではSVO文型とSOV文型が同程度の割合で多数であったことがわかったため、この仮説は否定された。したがって本研究ではSVO文型がSOV文型よりも優位に立つことができる利点を持っていたため、次第にSVO文型英語の話者が増えることで語順の固定化が起こる際にSVO文型に固定化されたという仮説を立て、研究を行った。

2. 研究方法

同じ意味の例文をSVO文型、SOV文型のそれぞれの語順で作成、またそれぞれの文を前置し、その違いを比較した。これを調査1とした。格変化が消失し、英語の語順の固定化が徐々になされた時期にSVO文型の数が増加したのであれば、SOV文型よりもSVO文型が有利な要素を有していたと考えられ、「SVO文型がSOV文型よりも優位に立つことができる利点を持っていたため、次第にSVO文型英語の話者が増えることで語順の固定化が起こる際にSVO文型に固定化された」という仮説を支持するものになりうる。したがって、SVO文型が増加した時期を先行研究から調査し、その時期と格変化が消失した時期を比較した。これを調査2とした。

《調査1》

「私はジョンを愛している」という意の英文をSVO、SOV文型のそれぞれで作成し、相違点を比較する。この際に作成した文をこれ以降「平叙文」とする。また、それぞれの英文を前置させ、相違点を比較する。この際に

作成した文をこれ以降「前置文」とする。この前置は「John」を強調するために行われ、「ジョンっていうのはね、私が好きな人です。」という意味になる。会話文中ではコンマは発音されない。よってそれぞれの前置文のコンマを消去し、この文をこれ以降「会話文中の前置文」とする。以下に実験内容を記す。

①SVO文型

1-1.平叙文	1-2.前置文	1-3.会話文中での前置文
I love John.	John, I love.	John I love.

②SOV文型

2-1.平叙文	2-2.前置文	2-3.会話文中での前置文
I John love.	John, I love.	John I love.

《調査2》

SVO文型の文が増加した時期と格変化が消失した時期をグラフを作成することで比較する。なお、時代ごとのSVO文型の割合のデータは橋本功氏の先行研究から引用した。

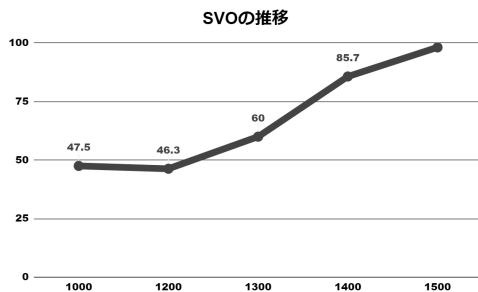
3. 結果

《調査1》

SVO文型下の会話文中での前置文ではその語順がSVO文型を満たしていないために、仮にコンマがなくともその文が平叙文ではなく、前置文であることがわかることがわかった。対してSOV文型下の会話文中での前置文ではその語順がSOV文型を満たす形となっている。これにより、この文は「John」を前置することで、元の「私はジョンを愛している」という意の英文の前置文ではなく、「ジョンは私を愛している」という意の英文の平叙文として解釈される可能性が生まれることがわかった。このことから、SOV文型では英文を前置すると本来伝えたい英文の意味とは異なった意味で解釈される可能性があり、そのことにより解釈に齟齬が起きる場合があるということがわかった。

《調査2》

図1から分かるようにSVO文型が増加し始めたのは13世紀から15世紀にかけてであった事がわかった。



↑ 図1

4. 考察

調査1から英語において前置をする場合はSOV文型よりもSVO文型のほうが優れていることがわかった。このことから格変化が消失した英語ではSOV文型では解釈に誤解が生じることがあると考えられる。そのような文型は使いづらいため結果的にSVO文型の話者が増加し、SVO文型に固定化されたのではないかと考えた。調査2から格変化が消失し、英語の語順の固定化が徐々になされた12～15世紀にかけてSVO文型の数も増加した事がわかったため、SVO文型はSOV文型よりもいくらかの有利な点を持っていたと考えられる。

5. 結論

上記の調査は当初立てた「SVO文型がSOV文型よりも優位に立つことができる利点を持っていたため、次第にSVO文型英語の話者が増えることで語順の固定化が起こる際にSVO文型に固定化された」という仮説の立証には至らなかったが、仮説を支持する根拠の一つといえる。立証に至らなかった理由としてはSVO文型のほうが有

利な事象を多く挙げられていないこと、またSOV文型が有利な事象について考慮していないことが挙げられる。将来の研究においてこれらの事柄が示され、仮説が立証されることを期待する。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

堀田隆一(2017/12/20)『現代英語を英語史の視点から考える 第12回 なぜ英語はSVOなのか(後編)』
https://www.kenkyusha.co.jp/uploads/history_of_english/series.html 2021/9/1
唐沢一友(2011/9/13初版)『英語のルーツ』120-123、190-195、198-202 春風社
橋本功(2013/3/25/初版第四版)『英語史入門』78-84、113、167-171、175-176